


## 平成27年度国立天文台研究集会開催報告書

平成28年 2月22日

国立天文台長 殿

|         |   |  |        |                               |
|---------|---|--|--------|-------------------------------|
| 代表者     | 氏 名   | (ふりがな) いちもと きよし  |        |                               |
|         |   | 一本 潔  |        |                               |
|         | 所属・職  | 京都大学理学研究科・教授   |        |                               |
|         | 電話  | 0578-86-2311   | E-mail | ichimoto@kwasan.kyoto-u.ac.jp |
| 研究集会名   | 太陽研究者連絡会シンポジウム（太陽研連シンポ）   |  |        |                               |
| 開催期間    | 2016年 2月15日 ～ 2016年 2月17日   |  |        |                               |
| 開催場所    | 国立天文台三鷹・大セミナー室  |  |        |                               |
| 参加人数    | 92名   |  |        |                               |
| 研究集会の概要 | <p>本研究集会は、国内外の太陽研究について、最近の科学成果や技術的進展を深く議論することを主たる目的としたものである。天文学会・SGEPSSなどの通常学会よりも講演あたりの時間を長くとり、レビューや議論に重きをおいた開催方式とし、研究者個々人の研究進展の一助とするだけでなく、コミュニティとしての大方針を方向付けることを目指すものである。</p> <p>今回は、新しい観測プロジェクト、特に提案中の次期観測衛星Solar-Cについて、宇宙研の中型衛星第一号機が火星衛星探査に決まった事を受け、現在のミッション計画提案書を見直すための、突っ込んだ話し合いを行う場とした。科学的技術的課題のみなならず、名古屋大学ISEE・京都大学天文台など国内主要研究所や、大学・研究所を結ぶ汎研究組織「太陽圏環境変動観測ネットワーク」がSolar-C時代に果たす役割についても具体的に検討した。</p> <p>また現在将来にわたり、太陽物理学研究がより広い周辺分野と相互作用することが重要であると考え、今回は地球惑星圏分野のみでなく、天文学、プラズマ物理学分野との接点について深く議論することも目的とし、共同研究やお互いの理解を深めるため、それに応じた招待講演者を他分野から呼んでいる。</p> |  |        |                               |

|                                 |   |
|---------------------------------|---|
| <p>研究集会の成果</p>                  | <p>本研究集会では、2日半の日程の中で、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究機関のステータスレポートである「国内観測所の研究活動」</li> <li>・研究の進展状況を提示する「彩層・コロナ・太陽風」「地球・惑星への影響」「ひので10年目の成果」「フレア・CME」</li> <li>・今後の観測やコミュニティの進むべき方向を議論する「ALMA太陽観測」「Solar-Cを柱とする今後の太陽研究」</li> </ul> <p>の各セッションにおいて様々な発表が行われた。特にSolar-Cセッションにおいては、SOLAR-Cの検討状況及び戦略的中型以外の可能性、若手将来検討会議からのインプット、という2つの面において、大きく動きつつある各国の宇宙科学プロジェクトの動向と、世界的な太陽物理学の先端的装置計画の現状を踏まえ、幅広く将来計画の議論が行われた。全体の口頭講演数52件、ポスター30件、参加者92名（+ネット参加1、ポスターのみ参加3）と盛況であった。</p> <p>招待講演では25分の講演時間を確保して、単なる研究発表にとどまらない、また狭義の太陽物理学の範囲にとどまらない研究の現状の紹介が行われた。将来計画についても、日本の太陽物理学においては新たな科学課題に挑戦できる次世代計画の実現を図るべき局面であることを背景に様々な側面からの報告・議論が行われた。</p> <p>合わせて太陽研究者連絡会の総会も開催し、多機関にわたる研究者の情報共有の場としてのコミュニティの集会として意義あるものとなった。</p> |
| <p>その他参考となる事項<br/>(希望事項も含む)</p> | <p>本研究会では、国立天文台研究集会以外に名古屋大学・宇宙研からも旅費の補助を受けている。国立天文台研究集会の分の執行残は、出張者の宿泊先が自宅やコスモス会館等であったものを後で減額した分である。</p>   |